

た。

一方、私は森本さんからご自身が1964年に長野県Kanoで採集されたコバネナガハネカクシ属に含まれる4個体をご恵与いただいた。しかしながら、私が研究室移転等の事情でこの個体を検討することなく半世紀の時間が過ぎてしまった。近年になって、私が農大を去るに当たって標本整理をしていた折に、これらの埋もれていた個体を見出し検討した結果、未記載種と判明したので、2016年に *Lathrobium (Lathrobium) morimotoi* として「Elytra, New Series」誌上に記載発表した。この種小名はもちろん採集者の森本さんに献名したものである。

この論文を発表した際、タイプ標本に指定した個体の産地が Nagano, Kano と記されていたけなので、正確な地名を地図で探したが見出すことができなかった。このため、いずれ森本さんにお会いした折に、この記載個体の正確な採集場所を伺う積りでいたのに、今となってはそれを果たすことができなくなってしまった。そして、今更ながら今生で森本さんにお会いした折に、このことを含めて甲虫に関する森本さんの豊富な経験や広範な知識を吸収しておかなかったことが悔やまれてならない。謹んで生前の御交誼に感謝申し上げます、心から森本さんのご冥福をお祈り申し上げます。

ゾウムシはホソカタムシの貴重な副産物

青木淳一

〒106-0031 港区西麻布3-8-12

おそらく、私の名前は多くの分類学者の間ではダニの研究者として知られているであろう。しかし、私の経歴を振り返ってみると、少年時代から高校生までは甲虫大好き人間、特にホソカタムシにほれ込んでいた。大学生から横浜国立大学での勤務を終るころまでは、その姿かたちが甲虫類にそっくりなササラダニ類というダニ類の新種を記載しまくり（約460種の新種）、大学定年後の神奈川県立博物館勤務時代から、再びホソカタムシの研究に舞い戻ったのである。

昆虫採集という懐かしい行為、大人としてはちょっとばかり恥ずかしさを憶える行為も、熱中し始めると私にとっては素晴らしい老後を約束してくれた。ホソカタムシを採集するには枯れ木が目標となる。細い枯れ枝はピーティング、太い立ち枯れ木はフォギングという方法で行う。その際に、ホソカタムシ以外で最も良く採れるのがゴムシダマシとゾウムシなのである。採集から帰ってきて、まず行うのが採集品の類別であり、約20人の専門家へ発送する。採れてしまった甲虫を捨ててしまっただけでは申し訳ない。と同時に、もしかしたら珍しいものも入っているかもしれないという期待もある。

しかし、採集の現場でホソカタムシが一向に採れずに、ゾウムシばかりが採れることも多い。そ

んな時には頭に来て、ゾウムシなんかひねりつぶしてしまおうと思ったこともある。しかし、標本が届くと、いつも真っ先にお礼状とともに全部の種の同定結果をすぐに知らせて下さる森本さんのお顔を思い浮かべると、1匹も捨てられない。とくに、奈良の春日大社の近くの森で採れたものについて、青木淳一様「春日大社のゾウムシは大変な珍品です。私が初めて見る新属新種のように、セーシェルとサモアから3種知られている *Catolethrobium* に近似します。先にお送りいただきました新属新種についても、KOH処理をして土のような被覆を除去してみると、複雑な表面構造が出てきました」などというお返事をいただく、「ああ、棄てないでよかった」と胸をなでおろした。

その後、はじめて九州大学総合研究博物館へ森本さんをお訪ねした。私よりも1歳年長の森本さんとは虫と虫屋さんの話が大きい合った。研究室の引き出しの中には、ゾウムシの亜科ごとに記載すべき原稿や資料がきちんとまとめてあった。もうすぐ、キクイゾウムシ亜科がまとめられると嬉しそうに見せてくださった。しかし、それも間に合わずに、旅立たれてしまったのは、どんなに無念であったろうかと胸が痛む。